

小林 勉 教授

スポーツ・健康政策Ⅰ・Ⅱ、体育とスポーツ、
FLPスポーツ・健康科学プログラム、
FLP地域・公共マネジメントプログラム社会におけるスポーツの
抱える課題について
多角的に研究

小林先生の生活の中心には、一貫してサッカーがある。トップ選手を夢見た少年の頃、指導者への道をめざし始めた学生時代、そして指導者としてまた研究・教育者として学生と接している今も、小林先生とサッカーの関係は続いている。青年海外協力隊に参加し、ヴァヌアツのサッカー・ナショナルチームのコーチとして各種の国際大会も経験した。小林先生の専門は「スポーツ社会学」。スポーツと社会に関わる諸課題について研究しているのだ。

青年海外協力隊で
ヴァヌアツへ そこで得た
体験や疑問からスポーツ
と社会のあり方を研究

「スポーツは、例えば、サッカーの試合は11人对11人でボール1個というように、平等の条件で行われる。平等の中でやるから何が起るかわからないし、そこが面白いと、よく言われますね。しかし本当に、スポーツは平等でしょうか」

スポーツ社会学が専門でサッカーの指導者でもある小林先生は、筑波大学大学院を出るとすぐ青年海外協

力隊に参加し、ヴァヌアツ共和国の教育省青年スポーツ局に派遣された。そこでの体験から、本当にスポーツは平等なのかという疑問を持ったのだ。

小林先生がヴァヌアツに派遣されていたのは、1995年7月から1997年7月までの2年間である。「大学院の終わりがら青年海外協力隊の話があって、たまたまサッカーのナショナルチームのコーチを募集していると言うんですね。これは面白そうだと応募したら、派遣されることになったのです。ヴァヌアツでの仕事は2つ。一つはナショナル

チームのコーチをすることで、これがメイン。強くしてくれということでしたが、自分としてはそれなりに経験を積んできていたから自信はありましたよ」

もう一つの仕事は、国内のスポーツ全体を統括する部局にいたので、IOC（国際オリンピック委員会）とかFIFA（国際サッカー連盟）などから要請されるワークショップなどのコーディネイトだった。そして、1996年に行われたアトランタ・オリンピックのサッカーのオセアニア地区予選に出場。このときのことが今の研究につながって

いる、と小林先生は言う。

「地区予選はリーグ戦で、同じチーム相手に2試合戦うようになっていました。相手は強豪のオーストラリアやニュージーランドなどですが、かなりの点差で大敗するわけですよ。当時のオーストラリアにはドイツワールドカップでキャプテンとして活躍したビドゥカ選手などがいましたから、そうした相手に2回目の対戦ともなると、選手にとって結果はすでに戦う前から明らかなんです。ですからオーストラリア戦に出場することをためらう選手もいたりするわけです」

スポーツは平等で何が起るかわからないと言っけれど、選手にはわかりきっている。だから、試合に出場することをためらってしまう選手を笑えない、と。

「圧倒的な格差が存在します。要するに、相手はプロかそれに近い選手たちで、高級ホテルに泊まり専属のチームドクターもいる。一方われわれは、ポリスアカデミーのようなと

ころに宿泊して、もちろん専属のドクターなどいない。確かに、スタジアムの中の現象としては11人对11人で同じ条件になっていますけど、その平等の条件の中に立つまでのプロセスが、限りなく不平等なんですね」

スポーツがオリンピックやワールドカップのようにグローバル化していく中で、それが発展途上国にとってどんなインパクトを与えているの

か。少なくとも、途上国の選手たちにとって国際大会の舞台は、我々日本人が思いもよらないかたちで展開されている、という小林先生。発展途上国が周縁に位置づけられたまま、先進国が主導して展開される現状のスポーツのあり方に大きな疑問を感じたことが、今の研究の原点につながっているという。

子供のころからずっと
サッカー漬け
大学に入って、やがて
指導者の道をめざし始める

「中一の6月に病気で入院したのですが、ちょうど、サッカーのワールドカップがスペインで行われていて、その放送を病室のテレビで見っていました。1982年当時の日本では、ワールドカップも今のように熱狂的なものではなかったですね。でも私

は、世界に名だたる選手たちのプレーを見てとても興奮しましたよ。それまでただ漠然と好きだったサッカーが、とにかくサッカーは面白いと、さらに熱中するようになったんです」

小学生のときからクラブに入っていたという小林先生の少年時代は、大好きなサッカーに明け暮れる毎日だった。中学のころは、朝5時ごろ起きてボールを蹴ってから登校。そしてもちろん、放課後も学校が閉門されるぎりぎりまで練習した。

「キャプテンになったときは練習メニューを自分で組むなど、いつもサッカーのことばかり考えていました。そうするとまた、どんどんサッカーが好きになっていくんですね。そして、もうそのころには漠然とですが、将来は教員になって、高校のサッカー部の監督として全国大会に行きたいな、と思っていました」



小林 勉 (こばやし つとむ) 福島県生まれ。筑波大学大学院修士課程体育研究科体育方法学(スポーツ社会学)専攻修了。名古屋大学大学院国際開発研究科国際協力専攻博士後期課程修了。名古屋大学にて博士(学術)学位を授与される。信州大学教育学部専任講師を経て、2004年中央大学総合政策学部助教授。現在に至る。専門は「スポーツ社会学」。



ヴァヌアツのサッカー・ナショナルチームのメンバーと一緒に。真ん中に立っているのが小林先生。

問題があった。

「当時、高校サッカー界では静岡県
の高校が強く、全国的に有名で私も
あこがれていました。たまたま静岡
に親戚がいたので越境入学も考えよ
うと、1週間ほど、ある強豪高校の
サッカー部の試合に同行させても
らったんですよ。自分がそこでやっ
ていけるかどうかを見るためでした
が、とにかく選手のレベルが高い。
私も地元ではそこそこ自信を持って
いたつもりでしたが、静岡でやるに
はまだまだだと、結局は地元で有名
な監督がいた高校に進学しました」
高校を卒業した小林先生は、あこ
がれの筑波大学に進学した。スポー
ツ推薦ではなく、一般入試を受けて

の人に消費されるだけだったという
現実。若者の流出はとまらない上に、
開発による環境汚染などの問題が起
きている、というようなことがわ
かったりするんですね」

このような調査を通して学んだこ
とは、まず、現場に出ること。そし
て相手の人と同じ目線に身をおい
て、お互いの「顔」がわかって、初
めてホッとする部分の話してもらえ
るということだった、と言う小林先生。
アンケートを頼めば大量のデータ
が集まるかもしれないけれど、そこ
から見えるものには限界がある。実
際に体を運び、自分も汗を流しなが
ら、現場の人たちが何を感じている

合格したというから、サッカー漬け
だったと言いながら、しつかり受験
対策もやっていたのだ。そして、も
ちろんサッカー部に入った。

「当時の筑波大のサッカー部は、キャ
プテンの井原さん、副キャプテンの
ゴン・中山さんをはじめ、ほかの部
員も多くが各世代の日の丸組とい
うように、日本代表クラスのすごい
選手がたくさんいましたよ。そんな
中で、大学でもやっぱりサッカー漬
けでした」

しかし小林先生は、やがて指導者
への道を意識するようになる。
「筑波大学のサッカー部員は、学園
都市内にある小学校や高校に指導に
行くようになっていて、私も大学2
年のころから、地域の小学校のコー
チとか、ある中・高一貫校の監督の
ような形で指導していました。その
中で、子供たちに教える楽しさを
知ったのです」

そして、よりよい指導者になるた
めに、筑波大学大学院体育研究科で
研究を深めることにしたのだ。
「指導者は、スポーツ医学、栄養学、

のか、それを引き出す努力をする。
これが一番大事であると強調。そし
て、このやり方は今、中央大学のゼ
ミでも学生たちに指導していること
だ、と小林先生は言う。

小林先生のゼミのテーマは『現代
社会におけるスポーツの抱える課題
と可能性』。2年から4年まで合わ
せて二十数人が学んでいる。
「ゼミの学生は、2年から始めて3
年間で卒業論文を作ります。2年の
ときは情報の集め方、情報の信頼性、
文献の読み解き方、ヒアリング調査
をするときの心構えなどを徹底的に
指導します。そして、3〜4年は自
分のテーマに沿ってフィールドワー
クして、研究を
まとめていきま
す」

卒業生の論文
のテーマを見る
と、『スポーツ選
手のセカンド
キャリア研究』
『スポーツビジ
ネス戦略として

心理学、コーチング論など、いろい
ろな素養が必要となります。例えば、
筋力トレーニングといってもさまざ
まで、有酸素運動か無酸素運動か、
このトレーニングはどのくらいの負
荷でやると筋肉はどのように発達す
るかなど、専門的な知識がないと指
導できません。サッカーでは持久力
と瞬発力の両方が必要になります
が、その理想的な割合は長距離選手
のそれと大きく異なります。そうす
るとサッカーに適したトレーニング
方法が求められますし、タンパク質
をどのタイミングで摂取させた方が
選手にとって効果的となるのか等、
指導者には、そんなことへの目配り
も求められるんですよ」

できるだけ現地の人々と同じ 目線で考える努力をする

小林先生の大学時代はサッカーが
中心になっていたけれど、もう一つ
真剣に取り組んだのが『スポーツ社
会学』のゼミだった。

『メディアの活用』『平和構築戦略
としてのスポーツの可能性』など、
スポーツにかかわる幅広いテーマが
取り上げられていた。
少なくとも異なる分野の人とも話
せる能力が付き、お互いの接点を見
つけ出すことの重要性和その楽しさ
を身につけることができる。それが、
小林ゼミなのだ。

高校生の皆さんへ

小学校から大学までサッカー漬け
の生活だった小林先生は、現在、大
好きなサッカーを通して、社会とス
ポーツのかかわりを研究し、地域社
会を活性化するべく活動している。
子供のころに抱いた選手として活躍
する夢は、その延長線上として指導
者またスポーツ社会学の研究者と形
を変えた。そんな小林先生から、高
校生のキミたちにアドバイスをいた
だいた。

「自分はこれが好きだ、と言えるも
のを一つは見つけてほしい。そして、
好きだと思ったことを一生懸命やっ

「スポーツがいかに社会と結びつい
ているか、スポーツにはいいことば
かりでなく負の側面もある、という
ような内容を、具体的な事例をもと
に学んだのです。それがけっこう衝
撃的で、それまではスポーツはいい
ものだ、サッカーは楽しいものだ
というレベルでしかとらえていなかっ
たものが、別の視点から見直すきつ
かけになりましたね。結局、その研
究を大学院でも続けることにしたわ
けです」

例えば、実習で福島県に行き、ス
キー場開発によって村がどのように
変わっていくかを調査したこともあ
る。

「実際に現地に行き、じっくりと話
を聞くのです。そうすると、雇用機
会の拡大を期待して開発されたス
キー場が、実はそうではなくて都市



小林先生の論文が掲載され
ている書籍の一部。



てみましょう。キミたちが小さいこ
ろから持っている夢、好きなこと
は何だろうか。その夢を追いかけ、
夢の実現に努力することはとても大
事なことです。私の教えた学生の中
から、青年海外協力隊員として海外
で活躍している者が何人かいます。
大学のゼミで新たな夢を見つけたと
いうことでしようが、何かやりたい
と思ったら実行してみる。若いとき
には、そういう行動力も大切ですよ」



研究室でゼミの学生と一緒に。



ゼミでは文献の講読のほか、身体を運んで集めた調査結果な
どをもとに議論を深める。